校友時報

昭和63年3月7日
編集人兼発行人
秋田県能代市高塙2番1号
秋田県立能代高等学校新聞部
印刷所　㈱大勝堂印刷

今日はばたく 新世紀の担い手

今日三月七日（月）、第四十期生三百三十五名がそれぞれの思い出を胸に、青春を過ごしたこの学び舎に別れを告げ、新たなる世界へ旅び立ちをする。

昭和六十年、入学したこの年、本校にとっては創立六十周年記念という大きな節目の年に当り、記念式典や記念誌発行、記念講演などの事業、行事が行われ、新たな躍進の一歩をしるすにふさわしい幕あけとなった。

昨年六十一年は、三年間で最も活躍の多い年であった。部活動では、同好会から部へ昇格した水泳と空手の活躍が注目される。ともにインターハイに出場。さらに、九月の沖縄国体にも出場し、健闘した。この国体では、水泳部主将原田長政君が秋田県選手団の旗手を務めた。文化面では数々の英語弁論大会で好成績をとげた宮腰陸子さんの活躍など、特筆すべきものといえよう。能高祭を盲腸が団結し、すばらしい実力をみせた。

今日卒業生には三年間の修養の証とも言える卒業証書が、代表佐々木奈佳君（三A）を通じて手渡される。また卒業生を代表して西塚哲君（三G）は答辞を述べる。なお、三年間皆勤した生徒には、皆勤賞が贈られる。今年は昨年度より八名少ない二十名が受賞することになった。受賞者は次の通りである。

（三A）久保田和美・佐々木奈佳
（三B）繞　隆仁
（三C）武村真生
（三D）工藤　司・平塚百合子
（三E）淡路　浩・藤田美佳
（三F）小玉　栄・高杉英幹
保坂　功・渡辺　真
（三G）浅野成司・工藤　崇
坂本一仁・信太和夫
田口彦也・珍田宇臣
伊藤明子

今日の卒業式で、保坂功君（三F）が代表受賞することになっている。

さらに、一昨日、卒業式予行のあと記念品の伝達式が行われ、卒業生より学校へパイプ椅子吉脚が、また、在校生から卒業生へは、印鑑がそれぞれ贈られた。

卒業を祝して

校長　三田元悦

皆さま三年の勉学が実って卒業される三三五名の生徒諸君に、まずもって心から"おめでとう"を申し上げます。特に、これまで、ご子弟の健やかな成長を願って心をくだいてこられたご父兄の皆様には、今日の喜びはいかばかりと拝察申し上げ、心から祝意を表したいと思います。

さて、卒業生諸君には、いよいよ今日をもって思い出多い先生方や、共に励まし合ってきたクラスメイトに別れを告げ、それぞれ大学進学に、あるいは実社会へと自分の求める目標に向って旅立ちをするのでありますが、その前途につつがなく、幸多かれと祈りながら、一言はなむけの言葉を書き連べてみたいと思います。

それは、この世に生を享けた、ただ一度限りの人生を、生き甲斐あるものとして大切に生きていってほしいということであります。

「享け」命を語（うべな）いて」という言葉があります。この言葉は今は亡き秋田県知事であった小畑勇二郎先生が座右の銘の一つとされていた言葉であります。

「享け」とは、なんの逆らいもなく享受するという意味で、「命」とは、天から与えられた命、あるいは人生、「語いて」とは、従う、承諾するという意味で、つまり天から与えられた、たった一つの命、ただ一回限りの人生、それがあります。図画の時間に描いた絵は、間違えば消しゴムで消せます。私達の人生はこの画用紙に絵を書くことに似ています。だけど人生は一度きりだから間違えてもも消したりすることはできません。なぜなら、人生には消しゴムはないのだから……」と。

諸君の前途が健康で幸せであることを祈ります。

それが例えいかなるものであろうとも、これを喜んで受け、力の限り生き抜いていくということであります。

そもそも人間というものは、だれもが一人ひとり、喜怒哀楽のドラマを背負って生きているものであります。従って、これから歩んでいく道程は必ずしも平坦なことばかりとは限らないのであります。

小畑勇二郎先生が座右の銘の一つとされていた言葉であります。

「享け」とは、なんの逆らいもなく享受するという意味で、「命」とは、天から与えられた命、あるいは人生、「語いて」とは、従う、承諾するという意味で、つまり天から与えられた、たった一つの命、ただ一回限りの人生、それがあります。図画の時間に描いた絵は、間違えば消しゴムで消せます。私達の人生はこの画用紙に絵を書くことに似ています。だけど人生は一度きりだから間違えてもも消したりすることはできません。なぜなら、人生には消しゴムはないのだから……」と。

諸君の前途が健康で幸せであることを祈ります。

路 進 私大今年も難化か 内定の遅い公務員

今年の国公立大二次試験は、Aグループが一月二十八日、Bグループが三月四日、Cグループが三月七日から行われた。共通一次制度が変わって二年目の今年は、本校の受験者平均点が全国平均を大きく上回る健闘ぶりが見られたが共通一次自己採点後に二次の出願が可能となったこともあって、一般に安全志向が強く、輪切現象が顕著に表われた。例年通り、秋大（教育）と弘大（教育）、秋大（鉱山）と山大（工）の併願パターンが多い。また、今年の一つの傾向として、北海道地方の志願者が少なく、逆に東大、横浜国立大、埼玉大などの関東地方の志願者が多いことが上げられ、やはり首都圏志向の強さを反映している。なお、国公立大の合否は三月十四日以降発表される。

一方私立大では、すでに延べ百五十名を超える合格者を出してはいるものの、私大難化の余波を受けてか、過去三年間のうちで最も厳しい状況である。また、短大、各種専門学校ほぼ例年並みである。

大学入試に先がけて、九月以降実施されてきた就職試験は、今年は、民間の求人数が多く、県内では東北電力をはじめとして九名の採用が決まり、県外では、日本通運やリクルートなどへ六名の就職が決まった。そのほか公務員試験の結果、国家公務員Ⅲ種に二十二名が登録された。また、秋田県職三名、能代市役所、二ツ井役場、消防署に各一名ずつ採用が決まった。ただし、公務員試験に合格した生徒の中でも、十数名が大学受験をしているからみればこれらの生徒の動きを含め、今後就職面は、まだ流動的なものと思われる。

佐々木さん 銅賞

このたび、財文主催・文部省総務庁後援の、第三十一回全国学芸科学コンクールの結果が発表された。

本校からは、絵画部門・高校の部に出品し、次の三点が入賞した。

銅賞
「堤防」　一F　佐々木美奈子

入選
「世代」　三D　大高　正明
「海の夢」一D　信太　奈穂子

顧問の戸松恭一先生は、「堤防」について「あの作品は、ただ堤防が一つ書かれているだけなんだが、見る人に、巨大さと、迫力を感じさせる。そういうところが、良い点だろうな」と語られた。

上の写真は、12月18日発行の第205号で紹介した高校文化祭総合美術展、写真部門で推奨に、第20回能代山本総合美術巡回展で準特選にえらばれた、田中智君（1G）の作品「Dark zone」である。

学習の充実化を図る 増える授業時間

学力向上を目指す一環として、来年度から授業時間が従来より増えることになった。これは学校行事を短縮し、授業時間の確保と充実に当てようというものである。この改正による新たに増える授業時間数は、一年間で一年生が二十時間、二・三年生は二十四時間の約四日分が見込まれている。

主な改正例としては、まず始業式・終業式の日をそれぞれ三時間の授業が行われることになった。また、野球の全校応援は一年生のみの参加となる。生徒総会・生徒会立会演説会・十里強歩説明会などは一時間ずつ短縮される。

また、修学旅行は、来年度の新入生の年から四泊五日になりそうである。これは、交通費をはじめとする経費の問題などから、従来の五泊六日が困難になりつつあるためであり、行き先・日程などは検討中とのことである。なお、遠足は各学年とも引き続き行われることになる他、三年に一度行われていた芸術鑑賞会は、来年度から毎年行われることになった。

一方、秋田県教育委員会は県内公立学校の長期休業日数を増やすことを発表した。高校は、大学受験の進路指導の充実を狙ったもので、夏休みは七月二十二日から八月二十日までの三十日間で従来より三日増え、冬休みは十二月二十二日から一月十三日までの二十三日間と、日数は変わらず、三日後にずれこむ形となった。

学校側は、これらの改正日程をその度連絡する方針だが、来年度は国公立大共通一次も一月二十一・二十二日と早まることなどから共一直前に実施予定の模擬試験などの日程の調整をしている。生徒の反響は、「休み明けすぐの試験ということで、休み中の勉強に熱が入る」「気が引締まるので、かえって良くなった」「あせってしまう。精神的な負担がかかる」と賛否両論だが、「ということを、なぜ学校側は早く教えてくれないのか」という声も聞き逃せない。

三点

▼日本人の将来をどう考えるか、と中国の人に聞かれ戸惑ったことがあった。少し視野を広げてみると、周りには何かしらの緊張感を抱えた国がたくさんある。それらの国では、学生にいえども多かれ少なかれ国の運命と自分との緊密な接点を持たざるを得ない面がある。海外からの留学生の中には、かつて自分の身内が日本との戦争や仕事でひどい目にあったということで、日本の学生に暴力をふるう人もあるという。これを単に「逆うらみだ」ではすまされない、根強い民族感情が潜んでいると言えるのではないだろうか。▼生徒の三分の二を帰国子女や留学生が占めている国際基督教大学高等学校の斎藤和明校長が先頃来能し、「日本人は閉鎖的で、多様性を受け入れることが少ない」と言われた。確かに若い人たちの間でさえも、他と少し違ったものや行動をする人を特別視する傾向があり、国自体、その文化力を他国にアピールするのに消極的である。▼こんな例がある。外国語講師の採用の際、その外国語はもちろんのこと日本語も上手なのに、白人でないという理由で断われたり、髪を染めるよう言われたという。ここには、明らかな日本人の差別意識が見られると同時に、異質のものを嫌うはずの日本人が白人を尊重するという矛盾が感じられる。日本人にほ加えて都会主義のきらいがあるらしい。自分たちに都会の良い物はどんどん取り入れるが、嫌な物にはかかわらない。これが舞鶴斎藤氏の言われた「日本は国際化しない」ことの大きな原因なのではないか。▼高校生のうちはまだ国際化などと考えないにしても、多少なりともこの二都主義で自先のことにのみとらわれて実のない生活をするのだけはさけたい。目の前のことをやっかい事でも逃げず、いろいろな体験をし、せめて四年か後に、日本の将来を胸をはって語れる人になりたいものだ。